
若き姫の荊棘（けいきょく）

紀藤雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若き姫の荊棘^{けいきよく}

【Nコード】

N4805Z

【作者名】

紀藤雅

【あらすじ】

病気で若くして命を落とした少年が、何者かの導きにより、ある国の王女として再誕する。

そんな彼女（彼）の成長物語。

文章に対する誤字脱字の指摘や、批評などございましたらぜひ願
いします m ((m

前章（前） 病気の少年 （前書き）

始めまして！ 紀藤です！

初投稿で色々至らぬところがあると思いますがよろしくお願いします！

前章（前） 病気の少年

様々な生物が活動を始めているだろう、そんな朝、カーテンを突き刺すような太陽光が僕の体をまぶしく照らしていた。

「んっー」

最近色々あって寝たつきりだった僕は、久しぶりに目を覚まし背伸びをした。

（今日はなんか調子がいいなあ）

ここは、某都内の病院。僕は生まれつき心臓に病気を抱えていて、幼少期から何度も入退院を繰り返していたのだけれど、ここ最近は特に症状がひどく長期入院を余儀なくされている状態だった。

「香君。おはようございます。今日の調子はどう？」

そんな時、専任の看護師さんが朝の検診にやってきた。

「はいっ。今日はひさしぶりに調子がいいみたいで、なんかさすがいい気持ちですよ。」

（本当におかしいぐらい・・・）

「そうっ！きつと、香君ががんばってきたからねっ。このまま行けば、きつとよくなるわよ！」

「ありがとうございます。」

看護師さんの大げさな励ましに、軽く礼を言っておいた。

しばらくして看護師さんが去った後、僕はおもむろに読みかけの本をかばんから取り出した。

（こんな調子のいい日はめったにないんだから）

そう思いながら、取り出した本は大好きなファンタジー小説だった。（うん！やっぱりファンタジーはいいな！一時的でも現実を忘れて、没頭できるし！）

僕はその後もずっと本を読み続けた。まるで貪^{むさ}るように・・・

前章（前） 病気の少年 （後書き）

ちょっと短すぎましたけど、ご愛嬌ください m — — m

前章（中） 少年と家族 （前書き）

こんばんわ。前話は短すぎましたので、今回はもっと長くと思って投稿しました。

拙い文章だと思いますが、どうかご愛嬌ください m（―）（―）m
また、文章に対する誤字脱字の指摘や、批評などございましたらぜひお願いします m（―）（―）m

前章（中） 少年と家族

同日昼

病院の診察室で、医師と少年の母は、話し込んでいた。

「かねてから申し上げたとおり、香君はもう長くはないでしょう。ですから、今日のような日はもう訪れないかもしれません・・・。」

「はい・・・。」

「どうか、ご家族の時間を大切になさってください。」

「はい・・・。ありがとうございます。」

なだめる医師と沈む母親、部屋には二人の重い雰囲気が漂っていた。

僕が読んでいる本は、ファンタジーの中でもいわゆる王道といわれている部類のもので、王国の辺境に住む主人公の少年が、自身の持つ力によって様々な人と出会い、戦い、そして時勢の流れに巻き込まれていく話。

自身が歩んできた人生に比べて、猛々しく、輝いている。そんな魅力が僕を惹きつけてやまなかった。あるいは自身の抱く諦観にも似た感情が、そうさせたのかもしれない。

『コンコン』

その時、病室のドアを叩く音がした。

「はい。どうぞ。」

「香ちゃん〜。来たわよ〜。」

僕の返事に、暢気な声で答えたのは、つやのある長髪を後ろで括くつていた母の明美で、ゆっくりと扉を開けて中に入ってきた。

（ふう・・・）

僕は、キリのいい所でしおりを挿み、読書を中断した。

この現実に戻った時の高揚感の凋落は、何時でもなんとも寂しいものだった。

「香ちゃん、今日は元気そうね、よかったわ〜。そうそう、今日はあなたの好きな苺のショートケーキ持ってきたわよ〜。一緒に食べましょう。」

そう言つて、母は手に持っていた小さな箱を僕に見せて、近くの土台の上に置き、お皿とフォークを3セット取り出した。

（えっ！）

と僕は目の色を変えて母を見た。

「いいの！？ 食べちゃって！？」

「ふふつ。香ちゃんは、本当にケーキに目がないわね。まるで、女の子みたいに。」

確かに僕はケーキが大好きだ。食べたときに舌に感じるあのまろやかな甘さが僕の心を驚掴みにしているのだ。

「べっ、別に、性別は関係ないよ！ そんなことより、本当に食べたいの？」

「ええ。今日は特別に先生からOKが出たから。」

「やった！じゃあ速く食べよう、食べよう。なんか3つあるみたいだけど、僕が2つ食べちゃおう。うんうん。」

まるでどこか別の誰かに向けて言うかのように僕は言った。

「さて、食べようかなあー。どうしようかなあーと」

なにやらドアの方から刺すような視線が来ている気がしたが・・・
・無視した。

「いやあー！本当においしそうだあゝ。うれしいなあゝ、二つも食べれるなんてゝ。」

「じゃあ、いったただつきまー・・・」

『まって！』

その時、突然ドアをガラツと勢いよく開けて、一人の小学生ぐらいの小さな女の子が入ってきた。

（ふふっ。かかった、かかった。）

っと内心僕はほくそえんだ。

「まってよ！ お兄ちゃん！ 由愛の分本当に食べるのっ！？」

そう言つてツインテールの髪を逆立てるように、ほほを風船のように膨らませながら、開口一番怒鳴ってきたのは、僕の妹の由愛だった。

「仕方ないじゃん。だって由愛の姿見えなかったし、だったらもったいないから食べちゃおうって思っただけだよ。それに由愛、どうして母さんと一緒にすぐに入ってこなかったの？」

「えっ！・・・ そ、そんなこと別にいいじゃん！ちよつと病院の中を見てただけだよお！」

なんとも苦しい言い訳のような気がしたが、これ以上いじるのもかわいそうなので、こころでやめておくことにした。

「そうか、そうか、僕が悪かったよ。じゃあ由愛、こっちに来て一緒にケーキ食べような。」

「う、うん。たべるっ。」

そう言つと、由愛は一見恥ずかしそうに、しかし目輝かせながらをしながら、寄ってきた。

（かわいいやつ）

と思いながら、寄ってきた由愛の頭を軽く撫でてやった。

母はその光景を目を細めるようにして見ていた。

「そういえば、香ちゃん。『香ちゃん、今日は調子がいい見たいよ』って遙ちゃんに伝えたら、午後には見舞いに来てくれるって。」

「うん、そう、わかったよ。」

遙は幼少期からの幼馴染で、病気がちな僕を何故かいつも甲斐甲斐しく世話をしてくれている。

（自分のことだって、色々あるだろうに）

と思わないこともないけれど、こんな僕に付き合ってくれる数少ない友人の一人して、とても感謝していた。

「いつも、甲斐甲斐しく世話をしてくれる女の子……。これは香ちゃんに、脈ありね。」

「いやいや、そんなことないって。母さん・何いってるんだよ。」
（本当にそんなわけないじゃないか。あいつはどう考えても僕をペツトかなんかと思ってるよ……。）

「あら、そう？　じゃあそういうことにしておいてあげる。ふふっ。」

そんな時、

『ムッ！』

つと妹が口を尖らせた気がしたが、きつと気のせいだろう。

しばらくして、母と妹が病室を去った後、なにか体が熱く火照って来たような気がした。

（どうしたんだろう？）

っと疑問に思いはしたが、

（きつといつもの発作だろう。いい調子も長くは続かなかったなあ。

）

っと開き直り、体が許す限りに読むことに決めて、僕は再び読書を再会した。

本はちょうど、数々の名声を得た主人公が王国に呼ばれて王様と対面する場面だった。

（この主人公は、ひどく落ち着きはらっているように書かれてるけど、もし彼が僕だったらどうだろう？こんなふうに落ち着いて居られるかな？）

と、思いつつ、さらに、読み進めていくと、

主人公の力に目をつけた王女が、主人公を自分直属の騎士にした
いと言いつ出し、物議を醸し出す場面があり、

（姫様は、勝手だなあとか、いや実は裏があつてのことじゃないか
？）

など、体に汗を滲ませながら思案を巡らしていた。

それが、この世界で最後に僕が思考したことだった……

前章（中） 少年と家族 （後書き）

ダラダラと書いてしまいましたが、次で前章を終わりにして本編の方へ行きたいと目論んでおります。

また、よろしくお願いします m ((m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4805z/>

若き姫の荊棘（けいきよく）

2011年12月17日05時02分発行